

## 刊行にあたって

本書は、国立歴史民俗博物館が国立大学共同利用機関として、関東地方と近畿地方の研究者の参加と協力を得て、昭和56年度から昭和60年度にかけて実施した共同研究「古代集落遺跡の研究」の成果報告書である。

本館は、昭和56年の設立当初から歴史学・考古学・民俗学の三学問分野の協業を中心とする学際的な共同研究を推進するとともに、それと併行して各研究分野独自の研究テーマにもとづいた共同研究を進めてきた。この報告書はこれらの共同研究の成果の一部である。

近年の急激な土地開発の進行は、日本列島の全域においてさまざまな遺跡の破壊をもたらしている。古代集落遺跡もまた同様である。一個の集落遺跡を完全に消滅させる大規模の土地開発に対して、事前の緊急発掘調査もまた広域にわたって実施されてきている。その結果、各地において歴大な遺構ならびに遺物とその情報が検出されてきていることは、よく知られているところである。

しかしながら、個々の集落遺跡から出土した資料の整理と事実報告は行われていても、古代集落全体像の把握が不十分なため、その歴史的な具体像や位置づけが不明確な場合が多く、古代集落を考古学的に分析解明する研究方法が模索されているのが現状である。このため、本研究では、これまでに発掘調査された主要な古代集落遺跡に関する情報を収集整理し分析するとともに、考古学・古代史学・建築史学・歴史地理学等の関連研究分野の研究者の共同によっ

て、古代集落の歴史的全体像を把握するための方法論的基礎を検討することを目的とした。

本研究を実施するにあたって、土地開発に伴う大規模な発掘調査が行われている千葉県・埼玉県・東京都・神奈川県の間東地方南部と、大阪府を中心として近畿地方の2地域を主要な対象とした。すなわち、古代における「東国」と「畿内」の2地域における古代集落遺跡の特色の比較を考慮した。

その結果、集落の計画性、変遷、地域的特性ならびに遺物を手がかりとする古代集落の構造分析などについて、いくつかの手がかりを得ることができた。もっとも、古代集落の立地・構成に密接な関係を有するはずの隣接した水田跡等の生産の場に関する情報を把握することが困難であったため、十分な成果とはいえない状況にある。このことは、発掘調査等の独自のフィールドワークの施行が困難な、本館の共同研究としてはやむを得ぬところであった。各位の率直なご批判をいただければ幸いである。

成果を報告するにあたり、研究会において貴重な資料や研究成果をご報告下さった研究協力者の方々や、現地調査に際して多大なご協力をいただいた千葉県文化財センター・大阪府文化財センター・日本考古学研究所の方々に対して、心より感謝申し上げる次第である。

昭和63年12月

研究代表者

国立歴史民俗博物館教授・考古研究部

岡田茂弘